



Japan Society of
Youth and Adolescent Psychology

Newsletter

第 70 号 2017 年 1 月 7 日
発行：日本青年心理学会事務局

■目次

<ニューズレター担当理事挨拶>

小塩真司：新しいニューズレターにご期待下さい・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

<特集：青年とデジタルツールとの出会い>

齊藤誠一：1980 年代にあったデジタルツール・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

岡田 努：黎明期のデジタルツールとの出会い・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

吉田悦子：青年とデジタルツールと世界観・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

石本雄真：これがあるから居場所がある？・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

<書評：デジタルツールと心理学に関連した選書での私のおすすめ，この一冊>

大谷宗啓：鈴木謙介（著）

『ウェブ社会のゆくえ：＜多孔化＞した現実のなかで』・・・・・・・・・・ 4

<書評>

速水敏彦：中間玲子（編著）

『自尊感情の心理学：理解を深める「取扱説明書」』・・・・・・・・・・ 5

<国際交流委員会：国際ワークショップ開催>

茂垣まどか：グローバルな活動のための一つの橋渡しとして・・・・・・・・ 5

池田幸恭：2016 年度国際ワークショップの 10 年後・・・・・・・・・・ 6

日原尚吾：国際交流に気後れする自分を後押ししてくれました・・・・・・・・ 6

杉浦祐子：2016 年度国際ワークショップに参加して・・・・・・・・・・ 7

<ニューズレター担当理事挨拶>

新しいニューズレターにご期待下さい

日本青年心理学会ニューズレター担当理事

小塩真司（早稲田大学）

日本青年心理学会ニューズレターは、今号で 70 号という記念すべき号数を数えることになりました。そして今号より、ニューズレターは紙媒体ではなく Web サイトへの掲載という形をとることになります。

昨今は多くの学会で会員数が伸び悩み、学会のあり方そのものについても議論がなされるようになってきています。しかし、青年期という人生の一時期に関心を持つ人々は多いように思います。今回ニューズレターが Web サイトに掲載されることによって、このニューズレターは会員のみならず多くの人々の目に留まる媒体になることが期待されます。また、紙面の制約がなくなることから文字数に制約のない掘り下げた記事の執筆が可能になり、記事から他のサイトへリンクを張ることにより論文やニュース、書籍などに簡単にアクセスすることもできるようになります。

ニューズレター編集委員会では、これまで以上に多くの人々に青年心理学に関心を持ってもらえるよう、Web サイトへの掲載ならではの工夫や、記事内容の充実を図っていきたいと考えています。今後のニューズレターの展開にご期待下さい。

＜特集＞ 青年とデジタルツールとの出会い

今回（第 70 号）からニューズレターが電子化されました。これまで紙媒体だったニューズレターが電子媒体に一本化されます。それに伴い、本特集では「青年とデジタルツールとの出会い」をテーマといたしました。テレビ・冷蔵庫・洗濯機以降、コンピュータ、タブレット、スマートフォンなど、デジタルツールは次々と社会現象を引き起こし、我々の世界観に変革をもたらしてきていますが、皆様は青年期にどのようなデジタルツールと出会われたのでしょうか。LINE, Twitter, Instagram, Facebook といった SNS についていけないと感じている方も、それらを自在に使いこなしている方も、自分自身のデジタルツールとの出会いを思い起こした上で、改めて現代青年とデジタルツールについて考えるきっかけとしていただけたら幸いです。ご執筆くださいました会員の方々、貴重なご経験を共有してくださり、ありがとうございました。

（担当：三好昭子・佐方哲彦）

1980 年代にあったデジタルツール

齊藤誠一（神戸大学大学院人間発達環境学研究科）

青年期を長く見積もって、最初に就職した 29 歳（1985 年）までとしても、今日のようなデジタルツールといった物はほとんどなく、せいぜい次に述べるような物がそれに該当するくらいでした。

【電卓】学部 2 年（1976 年）の時、心理学研究法で行ったミューラーリヤーの錯視実験のデータを t 検定しなくてはならず、当時の心理統計のバイブルであった岩原信九郎先生の名著『教育と心理のための推計学』を見ながら、データを計算式にあてはめて、 t 値を計算しました。今なら 100 円で買える機能の電卓を教室事務室から借り、感激しながら計算したことを覚えています。当時はデジタルという言葉も使われていませんでしたが、これが最初に手にしたデジタル機器かと思います。

【東京大学大型計算機センター】学部の卒論は藤原喜悦先生のご指導を受け、「数字では人間なんかわからないよ」と言われ、卒論も修論も不登校事例で書いたため、統計とはまるで縁がありませんでした。ただ、突然「数量化Ⅲ類」を勉強しようと言われ、当時助手でいらした野口裕之先生のセミナーを受けたところ、資料に大型計算機から打ち出した結果があり、何となく感激してしまいました。その後、筑波大の加藤隆勝先生の指導を受けようと思い、筑波大の OD であった吉田富二雄先生に相談したところ、データ分析ができないとだめだと言われ、SPSS を教わり、パンチカードの束を持って、東大大型計算機センターに連れて行かれました。今ではパソコンで瞬間にできる処理を大型計算機で行い、その結果が連続用紙に出力されるのを待ちます。医薬分離の前の大病院の薬局と同じく、印刷が終わると受付番号が掲示され、それを取りに行きました。そこでは、松井豊先生にも偶然お会いしました。

【筑波大学学術情報センター】2 回目の修士論文を筑波大で書くことになり、そこで会ったのが、これまで経験したようなパンチカードを読み込ませるバッジ処理ではなく、TSS 処理と呼ばれる大型計算機との対話型処理システムでした。（今は当たり前ですが）センターの端末室に行かなくても電話やモデムを介しての処理ができたり、図書館書籍や PA の検索がコンピュータの端末のできる TULIPS という図書館システムがあったりして、1982 年当時は驚きの連続でした。データ処理ソフトも対話形式の SAS が導入されていて、BMDP や SPSS よりも高級な感じがし、多くの仲間が SAS に移っていきました。内地留学にいられた後藤宗理先生がパーカー姿で学情センターから分厚い計算出力を抱えて、研究室に戻ってこられる姿を見たのも懐かしく思い出されます。

【ワープロ/パソコン】筑波大にいた頃、少しずつ PC98 シリーズ（NEC パソコン）が広がり始め、BASIC で統計プログラムを開発する院生も現れ、ようやくワープロソフトやワープロ専用機も使われ始めました。ただ、論文をワープロで書くのはまだまだ後のことです。ワープロソフトでいえば「松」や「一太郎」、表計算ソフトで言えば「Lotus

1-2-3」が登場したのもこの頃かと思います。

これらはとても身近なツールとは言えない大きなものばかりで、一般の青年に普及するデジタルツールの出現までもう少し時間がかかりました。CD もまだ出始めで、主流は LP レコード、録音はカセットテープ、電話機はまだ電電公社のダイヤル電話機でした。学校で話し、家でも長電話をするといったテレホンエイジや、ポケベルで暗号のような会話をしていた高校生も今やもう中高年になってしまったようです。このように考えて見ると、デジタルツールは青年に影響を与えたというよりも、研究者の卵であった院生に大きな影響を与えたように思います。

黎明期のデジタルツールとの出会い

岡田 努（金沢大学）

今の世の中でデジタルツールと言うと、おそらく、スマートフォンに代表される情報通信機器と、それを利用した SNS などのデジタルコンテンツが中心となるだろう。しかし自分が「青年」であった時代には、そのようなものは陰も形もなく、もっと基本的な技術との出会いに始まる。自分は世代的には「新人類」と呼ばれる世代に近いらしい。（特集にちなんで、文献はネットからの引用とする。よい子は真似してはいけません）。Wikipedia の[新人類]の項によれば、新人類について明確な定義はないがおおよそ 1950 年代後半から 1960 年代前半生まれを指すらしい。そして、テクノポップを初めとしたサブカルチャーの体験を共有するのが特徴とされている。

こうした文化は 1980 年代を中心としたエレクトロニクス技術の進展によってもたらされたものと言えよう。テクノブームは電子楽器が実用的なものとなった証であり、またパソコン（当時はマイコンと呼ばれた）の登場によって、専門家以外でも「電子計算機」を身近に扱える時代が到来した。当時所属していた学習院大学の心理学研究室でも、真新しい NEC PC-8001 を奪い合って BASIC 言語のプログラミングで「遊んだ」ことが思い出される（出来合いのアプリなどないので自分でプログラミングするのが唯一の遊びであった）。しかしインターネットもパソコン通信も普及する以前の時代である。単体のパソコンを操作できるだけで、十分「新人類」「現代青年」らしさを醸し出すことができた。スマートフォンを使いこなし、画面上に現れた対人関係や社会と現実社会が融合した仮想空間でもリアリティを感じられる今の青年の姿には隔世の感があるが、もしかしたらデジタル機器に抵抗感の少ない「新人類」世代がその始まりだったのかもしれない。

青年とデジタルツールと世界観

吉田悦子（東京大学大学院

新領域創成科学研究科博士課程）

博士課程では、環境問題に関するコミュニケーションの課題に取り組んでいる。その私が、まず思い浮かべるデジタルツールは、Twitter や Facebook などのソーシャル・ネットワーク・サービス(SNS)である。SNS は、私が青年期にデジタルツールに出会ったころとは比較にならない量と質の情報共有が可能である。また、東日本大震災による福島原発事故当時の孤立した情報弱者の救済や放射能汚染の実態究明において、SNS はテレビやラジオ、新聞などのマスメディアとは異なる役割を果たした。しかし、いろいろなデータをみると、全世代を通じて利用が高い情報伝達ツールはテレビやラジオ、新聞である。SNS の利用者数は相対的に少なく、内訳では青年期が最も多い。理由を考えてみた。

SNS では、他者とのつながり方を自在に調整したり、匿名や複数のアカウントを持つことで別人として情報発信ができる。その他の世代と比べて青年期の SNS 利用が多い理由は、SNS の恣意的な機能が、現代の青年の特徴である他者と競い合うことを避け、干渉しすぎないように適度な距離を保つ傾向を持つことと合致するためであろう。しかし、情報伝達ツール全体では SNS の利用者が相対的に少ないことから、デジタルツールの利用で得られる情報は、青年期など特定の世代間で同じデジタルツールを持つ者同士の閉じた世界のものであるといえる。私が、「SNS は震災や事故当時に活躍した」と

認識しているのも、デジタルツールで大勢の人々とつながり、膨大な情報を扱っている
と錯覚しているだけで、実は限られた世界での話である。

青年期は、目まぐるしく進化するデジタルツールを一番使いこなしている世代である。
しかし、デジタルツール上の世界観は、世代間でさほど変わらないように思える。デジ
タルツールは、様々な世代にとって他者とのつながりや膨大な情報を自分でコントロ
ールすることで万能感が得られるソフトな鎧のようなものである。青年期を過ぎた私にも、案外
心地の良いものだ。

これがあるから居場所がある？

石本雄真（鳥取大学）

居場所に関する研究を行っている者として、RADWIMPS の携帯電話という曲にある
「これがあるから今日もどこかの誰かのポッケの中に僕の居場所があるんだろう」とい
う歌詞がずっと引っかかっている。冒頭の“これ”とは携帯電話を指している。引っか
かっている、というのは、携帯電話（今ならスマートフォン）があることで、むしろ居
場所のなさにつながるのではないかと思っているからだ。しかし RADWIMPS は青年期
に人気があり、今青年期を中心に大ヒットしている「君の名は。」の音楽も全面的に担
当している。きっと青年の心情をしっかりと捉えているに違いない（ただし RADWIMPS
自身はもう青年といえる年代ではない）。だとすれば、自分の考えの方が誤っているの
だろうか？であれば、青年期を対象に研究する身としては困ったものである。

私自身はデジタルツールが次々と現れる中で青年期を過ごしてきた。高校生の終わり
ごろから携帯電話を持つ友人が現れ始め、大学生の間にレポートや卒論を PC で書くの
が当然になり、大学を卒業するころから SNS が広がり始めた。今でも毎日のように新
しいデジタルツールが現れるものの、その頃は、形を変えながらも今も存在感の大きい
携帯電話、PC、SNS といったデジタルツールが次々と登場した時代であったと思う。
今では、仕事のスケジュール管理から家族間での買い物メモの共有ですらデジタルで行
っていて、デジタルツールのない生活は考えられない。それでも、今の中高生をみると
「自分が中高生の頃は今のように携帯電話やスマートフォンが普及していなくて良か
った」といつも思う。結局どこかでデジタルツールのことをネガティブに捉えているの
だろう。

もちろん、上述の歌詞が青年の心情のすべてではないだろうが、スマホがあるから私
には居場所があると感じている青年がいることも間違いないだろう。ずっと“引っかか
っている”のはすっきりしないが、わかった気になってすっきりしても仕方がない。こ
れからも“引っかかっている”感じを持ち続けたまま青年心理と向き合っていきたいと
思う。

<書評：デジタルツールと心理学に関連した選書での私のおすすめ、この一冊>

『ウェブ社会のゆくえ：＜多孔化＞した現実のなかで』

鈴木謙介（著） NHK 出版（2013 年刊）

大谷宗啓（滋賀大学非常勤講師）

今日の日本におけるスマートフォンの利用率は、20 歳代に限れば 87.0%にのぼる（総
務省、2016）。これだけ多くの者が情報端末を携帯し、常時つながり続けるという状況は、
私たちの社会、対人関係、自己形成のあり方の変化を予期させる。顧みれば、新しいツ
ールが広汎に普及する局面では常に大きな変化が予期されてきた。携帯音楽プレーヤー
やコードレス電話機が普及した時には個人化が、ポケットベルや携帯電話が普及した時
にはコンサマトリー化が、インターネットが普及した時には身体性やオンラインペルソ
ナの問題が、人と社会を大きく変えうると語られた。スマートフォンの広汎な普及もま
た多くの研究を生むことになるだろう。そして 10 年後には、「ああ、そんな時代もあったね」
と懐古されるのかも知れない。どだい、10 年もすれば技術も様変わりし、別のツール
に置き換わっていてもおかしくない。しかし、そこでただ懐古されるだけに終わるのか、
なお有益な示唆を提供する物となるのか、時代状況に注目した研究の真価を決めるの

ではないだろうか。

本書は、理論社会学を専門とする鈴木謙介氏の著作である。著者は、物理空間の中に存在する個人に複数のオンラインの関係が入り込むことによって、現実の空間に付随する意味の空間に他の場所からの情報が入り込む穴が無数に開き、複雑なリアリティを形成している状態を「現実の多孔化」と呼んで、今日の社会と自己とを記述する切り口としている。新たな切り口を提起しながら、新奇さの強調に頼ることなく、より長い期間の大きな変化の流れの中に位置づけて、普遍性と特殊性とを抑制的に理解しようとする本書は、仮に状況が様変わりしてもなお人間理解の一助たりうると思われる。今日の問題を考えるためというよりも、人と社会というものを考えるためにこそ読みたい一冊である。

【引用文献】

[総務省 \(2016\). 平成 28 年版情報通信白書.](#)

<書評>

『[自尊感情の心理学：理解を深める「取扱説明書」](#)』

中間玲子（編著） 金子書房（2016 年刊）

速水敏彦（中部大学）

「自尊感情」は、心理学専攻の学生たちの卒論や修論に最も頻繁に登場する概念の一つである。私自身もこの概念を研究だけでなく、講義等でもしばしば使わせていただいている。しかし、この概念に接すると多くの心理学者は、大衆受けする便利なものだ、諸概念と容易に関連がつきそうだななどと一方ではくそ笑み、他方で本当にこんなに気軽に使ってよいのかと怪訝になるように思われる。そのような現在の心理学界の風潮の中で、自尊感情の多義性を鋭く指摘し、その暗部、「自尊感情神話」に果敢に迫られた著者たちの努力を大いに評価したい。

編著者は「そこで問題とされる事柄を、自尊感情の問題と理解してよいのだろうか」という疑問に対して関連諸概念についても提示する手続きをとるとして 9 つの概念をとりあげ、本全体の約半分ほどの紙面を用いている。著者たちはそれぞれの概念について丹念に説明していて好感がもてる。だが、なぜ、この 9 つの概念なのか、それぞれの概念の自尊感情との類似点、差異点は何かの整理が十分なされていないのは残念である。第Ⅲ部は特に圧巻でまさに自尊感情の深い理解へと我々を誘ってくれる。特に結論的な第 14 章は自尊感情神話に対して我々の目を開かせてくれる優れた論考といえる。ただ、前の 12 章や 13 章の内容も十分受けたものにしていただくとさらに良いものになったような気がする。

また、確かに自尊感情の批判自体は興味深い、「じゃあ、これから自尊感情を用いた研究はどうすりゃいいの」という問いには本書は明確には答えてくれない。この種の批判はこの本に限ったことではない。多くの心理学者は構成概念の欠陥を指摘するのは得意だが、その構成概念を補強し、確かな建造物に仕立てることは苦手だ。今後、その要求に少しでも答えてくれることを期待したい。とはいえ、本書が心理学の専門家だけでなく教育に関心をもつ多くの人たちにぜひ一読していただきたい 1 冊であることは言を俟たない。

<国際交流委員会：[国際ワークショップ](#)開催>

グローバルな活動のための一つの橋渡しとして

茂垣まどか（立教大学）

2016 年 8 月 6 日（土）、暑さ真っ只中の名古屋大学教育学部のキャンパスにおいて、国際交流委員会企画の国際ワークショップが開催された。新進気鋭のアイデンティティ研究者であり、大変精力的に研究活動し、かつ気さくで笑顔の親しみやすい Crocetti 氏を迎え、総勢 32 名の会は大いに盛り上がった。午前中には Crocetti 氏の講演およびグループセッションと質疑応答、午後には 3 名の会員による発表および Crocetti 氏からの

コメント、グループセッションと質疑応答、さらにはワークショップ全体を通じた Crocetti 氏からのコメントと、大変濃密な、盛りだくさんの会となった。基本的に講演や発表は英語で行われたが、名古屋大学の院生の協力のもとに、適宜日本語への通訳があり、また参加者同士のグループセッションや質疑応答では日本語も OK とした点が、理解の促進や取り組みやすさといった点で参加者からの評価が高かった。国際交流委員会としては、今回の成果を踏まえ、さらなる活動をすすめる予定である。

2016 年度国際ワークショップの 10 年後

池田幸恭（和洋女子大学）

国際交流の原動力は「感動」にあるのではないのでしょうか。言語や文化の違いから言いたいことをうまく伝えられない、相手の主張や思いが理解できないなどのもどかしさを越えて、新たな発見に至ったときの「感動」。様々な困難の中で、改めて気づく人の優しさと青年心理学の可能性への「感動」。そこには、外から与えられた課題とは異なる国際交流の原動力があるように感じています。

本年は ICP2016 が開催された記念すべき年でもあり、そこでの Crocetti 先生による講演とのつながりも意識して、国際ワークショップが企画されました。Crocetti 先生の精力的な研究活動とその成果に加えて、「英語を恐れずに、次回は国際学会で会いましょう」という講評が私たちへのエールのようにもあり印象深かったです。さらに、3名の先生方による発表、参加者同士のグループセッションにおける議論も非常に活発で、大きな刺激となりました。ワークショップをとおして、「世界の青年」という視点の大切さに気づかされました。目の前の青年に真摯に向き合うことと同時に、世界の青年たちのためにできることを考えることは、青年心理学研究の国際交流を考える上で大きな鍵となるように感じています。ワークショップに参加された皆さんの心を動かしたものが、本稿を読んでくれた方が国際交流へのさらなる関心を持っていただけたら大変嬉しく存じます。

一人ひとりの研究者はそれぞれ異なる背景と事情を抱えており、多様な国際交流への考え方、進め方があるといえます。だからこそ国際ワークショップという交流の場が大きな意義を持つのだと考えます。今回のワークショップが一過性の感動で終わるのではなく、今後の委員会活動、研究活動につながっていくことが大切であると実感しております。10 年後に自分がどのような経験を積み重ねて、国際交流をおこなっているのか、楽しみでもあり大きな課題でもあります。最後に、本ワークショップへ参加いただいた先生方、ワークショップの実施にご尽力いただいた名古屋大学院生の皆さまに厚く御礼申し上げます。

国際交流に気後れする自分を後押ししてくれました

日原尚吾（広島大学大学院教育学研究科）

本ワークショップの前の週、自分は横浜で ICP2016 に参加していましたが、日本で国際学会に参加できる良い機会と思っていたのですが、発表では伝えたい内容が伝わらず、シンポジウムでは速い英語を聞き取ることができないなどの失敗から、国際交流に対する気後れを感じていました。

こうした悩みを抱えていた自分にとって、本ワークショップへの参加は、国際交流をしていきたいという思いを強める良い機会となりました。

まず、最先端の研究を積極的に聴いていきたいと思いました。ワークショップでは、Crocetti 先生が最先端の研究を英語で発表された後、その内容についてグループで話し合い、質疑応答を行いました。英語を追うので精一杯な自分でも、聞き取れなかった箇所を補ったり他の参加者の視点を取り入れたりすることで、理解を深めることができました。そのため、純粋に研究についてもっと知りたいという興味がわき、国際的に最先端の研究を聴きたいという思いが強まりました。

次に、研究を積極的に英語で発表したいと思いました。ワークショップでは、日本の若手研究者の方々が自身の研究を英語で発表されました。いずれの先生の年齢も自分とは数年しか離れていませんでしたが、堂々とした見事な発表でした。若手研究者の方々

が活躍される姿を見て、英語で研究発表するモデルが自分の中で明確になるのを感じました。ワークショップの最後には、Crocetti 先生が若手研究者に対して、海外で研究を行うなど国際交流のための様々な仕組みを紹介してくださいました。Crocetti 先生自身が学生だった頃のエピソードを交えてお話ししてくださいだったため、馴染み深く、国際交流をより身近なものとして感じることができました。

最後に、本ワークショップは、Crocetti 先生の温かい人柄と、国際交流委員の先生方の心配りのおかげで、とても和やかで雰囲気の良い会でした。このような貴重な機会を設けてくださった先生方に、厚く御礼申し上げます。

2016 年度国際ワークショップに参加して

杉浦祐子（名古屋大学大学院
教育発達科学研究科）

8 月 6 日に、Bologna 大学の Elisabetta Crocetti 先生をお招きして開催された国際ワークショップに参加しました。午前中の講演では、社会的文脈の中の自己とアイデンティティというテーマで Crocetti 先生がされてきた 3 因子モデルによるアイデンティティ研究についてお話しくださいました。以前、共同研究に参加する機会をいただき、自分なりにアイデンティティの 3 因子について理解していると思っていましたが、今回のワークショップで、より理解を深めることができました。改めて学ぶことで自分の理解が合っているのかと不安になる部分もありましたが、ワークショップ中や懇親会の席で他の先生方や Crocetti 先生と話をさせていただき、自分の理解を再確認することができました。また、講演中に何度かグループディスカッションの時間がとられました。難しい内容のものもありましたが、同じグループになった先生方と話し合う中で、また、他のグループの意見を聴く中で、多くの気づきを得ることができました。くじびきでグループが決められたことも、普段は自分から積極的に交流できないでいた先生とも話せる機会となりました。

午後は 3 名の参加者による研究発表が行われ、それぞれの先生の研究発表を興味深く聴かせていただきました。Crocetti 先生が日本で作成された尺度に関心を持たれていたことが印象に残っています。日本の多くの研究で使用され、日本ではよく知られている尺度だったのですが、「どうして海外で多く使用される尺度を使用しないのか」とコメントされました。海外へと研究を発信するということは、日本国内の場合とは言語の違いだけではないということ意識しました。

ワークショップを通して様々なことを学ぶことができた 1 日でした。今回学んだことを今後活かしていきたいと思います。

最後になりましたが、今回、このような企画に参加できたことに感謝いたします。国際交流委員会の先生方、ありがとうございました。